

論 文

聖なる憎悪

定方 晟

世界のあちこちで紛争が起きている。人々はそのことを嘆きながらも、その原因を正しく追求しないように見える。原因の多くは宗教にある。人々は宗教は善という先入観にとらわれて、それを見落している。この状況が続くかぎり、宗教による世界平和の実現は、轍を北にして楚に適くことに等しいだろう。¹⁾

ここで私がいう宗教とはセム系の三大宗教、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教のことである。これらの宗教に共通しているのは、ひとに、自分のまわりには敵がいるという意識を吹きこむことである。そのことをこれらの宗教の聖典の中に探ってみよう。

(1) 聖なる憎悪・・・・<ユダヤ教>

ユダヤ教の聖典はタナク (Tanakh) と呼ばれる。これはキリスト教の旧約聖書に当たる。キリスト教はユダヤ教から生まれたが、ユダヤ教と対立もするので、ユダヤ教を知るのに旧約聖書に頼るのは危険かと思ったが、ユダヤ教に詳しいひとに聞くと、旧約聖書はタナクと全同だという。タナクの日本語訳も出版されているので（ミルトス・ヘブライ文化研究所発行「ヘブライ語聖書対訳シリーズ」）、対照してみると、そのとおりである。そこで、以下、引用は旧約聖書（日本聖書協会発行『聖書』、1973年、所収）から行うこととする。

「創世記」によると、神は世界を創造し、その結果をよしとした (1・25;1・31)。しかし、実際には必ずしもよくはなかった。アダムとエバは蛇に唆されて神の命に背いて楽園の木の実を食べてしまったのである。

神は蛇にいった。

「おまえは、この事を、したので、
すべての家畜、野のすべての獣のうち、
最ものろわれる。
おまえは腹で、這いあるき、
一生、ちりを食べるであろう。
わたしは恨みをおく、
おまえと女とのあいだに、
おまえのすえと女のすえとの間に。
彼はおまえのかしらを碎き、
おまえは彼のかかとを碎くであろう」

神はエバにいった。

聖なる憎悪

「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。
あなたは苦しんで子を産む。
それでもなお、あなたは夫を慕い、
彼はあなたを治めるであろう」

神はアダムにいった。
「地はあなたのためのろわれ、
あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」（以上、第3章）

聖典には冒頭から不吉な言葉が登場する。「呪い」や「恨み」は一般常識では悪徳であるが、ここでは神がそれを実行する。この神を敬うためには一般常識を捨てなければならない。

アダムにカインとアベルが生まれた。

アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。日がたって、カインは地の産物を持ってきて、主（=神）に供え物とした。アベルもまた、その群れのういごと肥えたものと持ってきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた。しかしカインとその供え物とは顧みられなかつたので、カインは大いに憤って、顔を伏せた。そこで主はカインに言われた、「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのですか。正しい事をしているのでしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せてあります。それはあなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません」

（4・2～7）

カインは弟を野原で殺した。神はいった。

「あなたは何をしたのです。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます。今あなたはのろわれてこの地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」

通常の人はこれらの記事を読んでカインに同情せずにはいないだろう。神はカインに「正しい事をしているのでしたら」といったが、かれにそれを疑わせたのは神自身ではないか。しかも神はカインの供え物を顧みなかった理由を全く述べていない。神の振舞はいじめそのものが目的であるようにみえる。

カインは主にいった。「わたしの罰は重くて負いきれません。あなたは、きょう、わたしを地のおもてから追放されました。わたしはあなたを離れて、地上の放浪者とならねばなりません。わたしを見付ける人はだれでもわたしを殺すでしょう。」主はカインに言われた、「い

や、そうではない。だれでもカインを殺す者は七倍の復讐を受けるでしょう。」そして主はカインを見付ける者が、だれも彼を打ち殺すことのないように、彼に一つのしるしをつけられた。カインは主の前を去って、エデンの東、ノドの地に住んだ。(4・13～16)

今度は復讐という言葉が現れる。神がこの言葉を発したのは、カインを守るためにあったかも知れない。だが、まさに神のこの行為によって復讐が聖化されてしまう。神が平然と口にするものは信徒も平然と口にするだろう。事実、カインの子孫レメクは次のようにいった。

アダとチラよ、わたしの声を聞け、レメクの妻たちよ、わたしの言葉に耳を傾けよ。わたしは受ける傷のために、人を殺し、受ける傷のために、わたしは若者を殺す。カインのための復讐が七倍ならば、レメクのための復讐は七十七倍。(4・23～24)

レメクがなぜ復讐を叫ぶのかは説明されていない。人を復讐の精神に馴染ませるのが目的であるかのように復讐という言葉が繰り返されるのみである。

神はノアを洪水から救い、かれを祝福し、その祝福を次の言葉で結んだ。

あなたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう。いかなる獣にも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、報復するであろう。(9・5)

今度は報復という言葉が現れる。神はなぜ祝福するだけでは満足しないのか。

ノアにはセム、ハム、ヤペテの三人の子がいた。あるとき

彼（ノア）はぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。カナンの父ハムは父の裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた。セムとヤペテとは着物を取って、肩にかけ、うしろ向きに歩み寄って、父の裸をおおい、顔をそむけて父の裸を見なかった。やがてノアは酔いがさめて、末の子が彼にした事を知ったとき、彼はいった。「カナンはのろわれよ。彼はしもべのしもべとなつて、その兄弟たちに仕える。」「セムの神、主はほむべきかな、カナンはそのしもべとなれ。神はヤペテを大いならしめ、セムの天幕に彼を住まわせられるように。カナンはそのしもべとなれ」(9・21～27)

「末の子」とはハムのことであろう。ノアはなぜかれに対して憤るのか。ハムがかれの裸を見たからか。ハムはわざとそうしたのではないだろう。それどころか、ノアはハムのおかげで裸でいることを免れたではないか。しかも、ノアはハムをのろわず、ハムの子であるカナンを呪う。全く理不尽というほかない。聖書の発想は異星人のそれのように不可解である。

セムの子孫にアブラハムが生まれた。主はかれに言った。

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしは

あなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」(12・1~2)

「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」(12・3)

神はまたしてものろう。なぜ祝福するだけにしないのか。しかも、ここにはユダヤ民族の自己中心主義が現れている。この聖典の主題はユダヤ民族の歴史の完成であって、他の民族は彼らの歴史の完成のための道具にすぎない。

アブラハムの妻サライは不妊であった。アブラハムはサライのすすめによって彼女の婢と交わった。婢は妊娠し、サライを見下すようになった。サライは怒り、婢は荒野に逃げた。そのとき婢に現れた主の使いのいう言葉がまた理解しがたい。

あなたは、みごもっています。あなたは男の子を産むでしょう。名をイシマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたのです。彼は野口バのような人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手は彼に逆らい、彼はすべての兄弟に敵して住むでしょう。

(16・12)

主は彼女を祝福しているのか、のろっているのか。

アブラハムの子はイサクであった。イサクの妻リベカは双子を生んだが、彼女が彼らをみごもったとき、主は彼女にいった。「二つの国民があなたの胎内にあり、二つの民があなたの腹から別れて出る。一つの民は他の民よりも強く、兄は弟に仕えるであろう」。兄はエサウ、弟はヤコブと名づけられた。

イサクは年老い、目がかすんで見えなくなった時、長子エサウを呼んで言った、「子よ」。彼は答えて言った、「ここにあります」。イサクは言った、「わたしは年老いて、いつ死ぬかも知れない。それであなたの武器、弓矢をもって野に出かけ、わたしのために、しかの肉をとってきて、わたしの好きなおいしい食べ物を作り、持ってきて食べさせよ。私は死ぬ前にあなたを祝福しよう。」

イサクがその子エサウに語るのをリベカは聞いていた。やがてエサウが、しかの肉を獲ようと野に出かけたとき、リベカはその子ヤコブに言った、「わたしは聞いていましたが、父は兄エサウに、『わたしのために、しかの肉をとってきて、おいしい食べ物を作り、わたしに食べさせよ。私は死ぬ前に、主の前であなたを祝福しよう』と言いました。それで、子よ、わたしの言葉にしたがい、わたしの言うとおりにしなさい。群れの所へ行って、そこからやぎの子の良いのを二頭わたしの所に取ってきなさい。わたしはそれで父のために、父の好きなおいしい食べ物を作りましょう。あなたはそれを持って行って父に食べさせなさい。父は死ぬ前にあなたを祝福するでしょう。ヤコブは母リベカにいった、「兄エサウは毛深い人ですが、わたしはなめらかです。おそらく父はわたしにさわってみるでしょう。そうすればわ

たしは父を欺く者と思われ、祝福を受けず、かえってのろいを受けるでしょう」。母は彼に言った、「子よ、あなたが受けるのろいはわたしを受けます。ただ、わたしの言葉に従い、行って取ってきなさい」。そこで彼は行ってやぎの子を取り、母の所に持ってきたので、母は父の好きなおいしい食べ物を作った。リベカは家にあった長子エサウの晴着を取って、弟ヤコブに着せ、また子やぎの皮を手と首のなめらかな所につけさせ、彼女が作ったおいしい食べ物とパンをその子ヤコブの手にわたした。

そこでヤコブは父の所へ行って言った、「父よ」。すると、父は言った、「わたしはここにいる。子よ、あなたはだれか」。ヤコブは父に言った、「長子エサウです。あなたがわたしに言わされたとおりにいたしました。どうぞ起きて、すわってわたしのしかの肉を食べ、あなたみずからわたしを祝福してください」。イサクはその子に言った、「子よ、どうしてあなたはこんなに早く手に入れたのか」。彼は言った、「あなたの神、主がわたしにしあわせを授けられたからです」。イサクはヤコブに言った、「子よ、近寄りなさい。わたしは、さわってみて、あなたが確かにわが子エサウであるかどうかをみよう」。ヤコブが、父イサクに近寄ったので、イサクは彼にさわってみて言った、「声はヤコブの声だが、手はエサウの手だ」。ヤコブの手が兄エサウの手のように毛深かったため、イサクはヤコブを見分けることができなかつたので、彼を祝福した。「もろもろの民はあなたに仕え、もろもろの国はあなたに身をかがめる。あなたは兄弟たちの主となり、あなたの母の子らは、あなたに身をかがめるであろう。あなたをのろう者はのろわれ、あなたを祝福するものは祝福される」。

イサクがヤコブを祝福し終わって、ヤコブが父イサクの前から出て行くとすぐ、兄エサウが狩から帰ってきた。彼もまたおいしい食べ物を作って、言った、「父よ、起きてあなたの子のしかの肉を食べ、あなたみずから、わたしを祝福してください」。父イサクは彼に言った、「あなたは、だれか」。彼は言った、「わたしはあなたの子、長子エサウです」。イサクは激しくふるえて言った、「それでは、あのしかの肉を取って、わたしに持ってきた者はだれか。わたしはあなたがくる前に、みんな食べて彼を祝福した。ゆえに彼が祝福を得るであろう」。エサウは父の言葉を聞いた時、大声をあげ、激しく叫んで、父に言った、「父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」。イサクは言った、「あなたの弟が偽ってやってきて、あなたの祝福を奪ってしまった」。「わたしは彼をあなたの主人とし、兄弟たちを皆しもべとして彼に与え、また穀物とぶどう酒を彼に授けた。わが子よ、今となっては、あなたのため何ができるようか」。エサウは言った、「父よ、あなたの祝福はただ一つだけですか。父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」。エサウは声をあげて泣いた。(以上、第27章より。一部省略)

親が子を憎み、兄と弟が争う、これを日常茶飯事と感じさせるのがこれらの物語である。エサウはヤコブに殺意を抱いた。母リベカはそれを知ってヤコブを逃がした。ヤコブは逃亡先でラケルという娘を知り、結婚した。ヤコブは舅から羊を詐取し、ラケルを連れて故郷に向かった。ラケルは父の神像を盗み出してきたが、追手が追いついたとき、像を尻の下に隠して「わたしは月経のため立てません」と偽った。ヤコブは故郷を目の前にして、兄エサウの復讐を恐れた。

だがエサウはヤコブに走りより、彼に口づけし、共に泣いた（33・4）。エサウはいった、「弟よ、わたしは十分もっている。あなたのものはあなたのものにしなさい」（33・9）

ヤコブはやがてイスラエルと呼ばれ、イスラエル民族の祖となる人物である。彼は上述のような狡猾な人間である。神がこのような人物を愛すると考え、彼を自分たちの祖と仰ぐイスラエル民族というのはいったいどういう民族か。

ヤコブの娘デナはヒビとハモルの子シケムに辱められた。シケムはデナを深く愛し、ヤコブに彼女との結婚を申込んだ。そのときヤコブの子らは「偽って」シケムらに「あなたがたの男子すべてが割礼を受ければ、承諾しよう」といった。シケムら一族は町の人々に呼びかけ皆で割礼を受けた。

三日目になって彼らが痛みを覚えている時、ヤコブのふたりの子、すなわちデナの兄弟シメオンとレビとは、おのおのつるぎを取って、不意に町を襲い、男子をことごとく殺し、またつるぎの刃にかけてハモルとその子シケムとを殺し、シケムの家からデナを連れだした。そしてヤコブの子らは殺された人々をはぎ、町をかすめた。彼らが妹を汚したからである。すなわち羊、牛、ろば及び町にあるものと、野にあるものをことごとくかすめた。

（34・25～29）

ヤコブは彼の十二人の息子のうち幼いヨセフを最も愛した。兄弟たちはヨセフを憎み、ヨセフが兄弟の束（妻の束？）が自分の束を拝んだ夢を見たと語ったとき、さらに憎み、日と月と十一の星が自分が拝んだ夢を見たと語ったとき、彼をねたんだ（37・4～11）。

ヨセフの夢は正夢になった。ヨセフは兄弟たちによって人買いに売られたが、エジプトで出世し、パロ（ファラオ）の大臣となった。飢饉の年に兄弟たちはエジプトの宮廷へ食料を乞いにきて弟をそれとは知らず拝んだ。ヨセフは自分の身を明さずに彼らを助けようとする。

わたしは少年時代にこの物語を読んで感動した。だが、今は批判を加えることができる。ヨセフは兄弟たちに無理難題を吹きかけ、兄弟たちを苦しめ、悲しませる。兄弟をスパイの嫌疑で投獄する。三日目にヨセフは彼らにいう。ひとりを牢に残し、他の者は故郷に帰って末の弟を連れてくるようにと。シメオンが残ることになった。ヨセフは彼を兄弟たちの目の前で縛る。兄弟たちは父のもとに戻るが、父は最愛のベニヤミンを手放さない。しかし食糧が尽きたので、彼らはベニヤミンを連れてエジプトに向かう。ヨセフはベニヤミンの袋に銀器をひそませ、窃盗の嫌疑をかける。彼らはベニヤミンの身代わりになることを申して。ついにヨセフは自分の身を明し、物語はハッピーエンドに終わる。しかし、ヨセフはなぜ兄弟を苦しめるのか。復讐のためか。兄弟愛を確かめるためか。いじめてから許す、ヨセフのやり方はユダヤの神のやり方そのものである。

「出エジプト記」によれば、ヨセフの死後、エジプトにイスラエルの子孫が増え、モーセが生まれた。彼は自分たちがエジプトで冷遇されているのを見て、エジプトを脱出することを企てた。パロはユダヤ人を便利な奴隸と見なしていたので、モーセの計画を阻止しようとした。このときモーセに神が現れ、彼の計画を助けることを約束した。ただし、一旦は「パロの心を

かたくなにして」パロがモーセの計画を妨げるようにさせるという。モーセは神の指図にしたがって、パロに「あなたはわたしの民を去らせないから」といって、杖でナイル川の水を打ち、水を血に変えた。魚は死に、川は臭氣を発し、エジプト人は川の水を飲むことができなくなつた。川だけではない、エジプト中の水が血になつた。しかし、パロは心をかたくなにし、モーセの要求に応じなかつた。

モーセはつぎに蛙で攻めた。蛙が寝室にまで侵入した。だがパロは心をかたくなにしたままだったので、モーセはさらにぶよ、あぶ、疫病、腫瘍、雹で攻めた。イスラエル人の居所には雹は降らなかつた。(第7章～第9章)

モーセはいった。「ヘブルびとの神、主はこう仰せられる。『いつまで、あなたは、わたしに屈伏することを拒むのですか。民を去らせて、わたしに仕えさせなさい』と」

神によって心をかたくなにさせられている哀れなパロはこれを拒否した。モーセは今度はいなごや闇黒でエジプトを攻めた。イスラエル人の居所には光があつた。(第10章)

主はモーセにいった。「わたしは、なお一つの災いを、パロとエジプトの上にくだし、その後、彼はあなたがたをここから去らせるであろう」(第11章)。そしてモーセらに次のようにいひつた。

イスラエルの会衆はみな、夕暮れにこれ（小羊）をほふり、その血を取り、小羊を食する家の入口の二つの柱と、かもいにそれを塗らなければならない。・・・急いでそれを食べなければならぬ。これは主の過越である。その夜わたしはエジプトの国を巡って、エジプトの国におる人と獸との、すべてのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであろう。わたしは主である。その血はあなたがたのおる家々で、あなたがたのために、しるしなとなり、わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであろう。この日はあなたがたに記念となり、あなたがたは主の祭としてこれを守り、代々、永久の定めとしてこれを守らなければならない。・・・(第12章)

モーセらは神の言葉を実行した。その結果、エジプト人のすべてのういごが殺され、家々から悲鳴が湧き上がつた。エジプト人は飾りや衣服をモーセらに与え、エジプトを立ち去つてもらつた。

モーセはシナイの山に登り、そこで神の言葉を聞いた。

あなたがたは刻んだ像を造つてはならない。それにひれ伏してはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵を施して、千代に至るであろう。(「出エジプト記」20・5) [Cf. 同34・7; 「申命記」5・9～10]

あなたは彼らの神々を拝んではならない。これに仕えてはならない。また彼らのおこないにならつてはならない。あなたは彼らを全く打ち倒し、その石の柱を打ち碎かねばならない。

(「出エジプト記」23・24) [Cf. 同 34・14; 「申命記」7・5; 12・2~3; 20・16~18]

「彼らのおこないにならってはならない」という言葉にとくに非難すべきところはない。しかし、「彼らの石の柱を打ち碎かねばならない」という言葉はどうか。前5世紀のギリシャ人ヘロドトスはペルシャ王カンビュセスが異教の神像を愚弄し、焼き払ったことを「暴挙」とし、他民族の信仰や慣習は尊重すべきであると教えた (『歴史』iii.37,38)。これはヘブライズムとヘレニズムの対照を示すよい例である。

モーセは自分の民が小牛の像を造って拝んだとき、激怒していった。「イスラエルの神、主はこう言われる、『あなたがたは、おのれの腰につるぎを帯び、宿営の中の門から門へ行き巡って、おのれのその兄弟、その友、その隣人を殺せ』」

レビの子たちが即日、三千人ほどを殺すと、モーセはいった。「あなたがたは、おのれのその子、その兄弟に逆らって、きょう、主に身をささげた。それで主は、きょう、あなたがたに祝福を与えられるであろう」(32・26~29)。同種の記事をさらに三つあげよう。

イスラエルは主に誓いを立てて言った、「もし、あなたがこの民をわたしの手にわたしてくれるならば、わたしはその町々をことごとく滅ぼしましょう」。主はイスラエルの言葉を聞きいれ、カナンびとをわたされたので、イスラエルはそのカナンびとと、その町々とをことごとく滅ぼした。(「民数記」21・2~3)

主はモーセに言われた、「ミデアンびとにイスラエルの人々のあだを報いなさい」。彼ら (イスラエルの人々) は主がモーセに命じられたようにミデアンびとと戦って、その男子をみな殺した。生け放った者 (女と子供) と、かすめたものと、奪ったものを携えて戻ってきた。モーセは怒って言った、「あなたがたは女たちをみな生かしておいたのか。子供たちのうちの男の子をみな殺し、また男と寝て、男を知った女をみな殺しなさい。(定方注、男と寝た女は子を生む可能性があるからだろう)。ただし、まだ男と寝ず、男を知らない娘はすべてあなたがたのために生かしておきなさい」(「民数記」第31章)

同じ母に生れたあなたの兄弟、またはあなたのむすこ、娘、またはあなたのふところの妻、またはあなたと身命を共にする友が、ひそかに誘って「われわれは行って他の神々に仕えよう」と言うかも知れない。その人の言うことを聞いてはならない。その人をあわれんではならない。必ず彼を殺さなければならない。彼を殺すには、あなた (モーセ) がまず彼に手を下し、その後、民がみな手を下さなければならない。そうすればイスラエルは皆聞いて恐れ、重ねてこのような悪い事を、あなたがたのうちに行わないであろう。(「申命記」第13章)

モーセは死に臨んだとき、イスラエルびとを祝福し、次のようにいった。

イスラエルよ、あなたはしあわせである。だれがあなたのように、主に救われた民があるであろうか。主はあなたを助ける盾、あなたの威光のつるぎ、あなたの敵はあなたへつらい服し、あなたは彼らの高き所を踏み進むであろう。（「申命記」33・29）

以上、モーセ五書から引用した。モーセ五書には次のような言葉もある。

「あなたはあだを返してはならない。あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならぬ」（「レビ記」19・18）

聖書学者は新約の「自分を愛するように隣人を愛せ」（「マタイによる福音書」19・19）の先駆として上述の言葉を誇らしげに引用する。彼らはわたしが引用した数々の言葉についてほんんど口をつぐんでいる。

「詩篇」からも引用しておこう。ダビデは神が自分たちの敵をいつまでたっても滅ぼしてくれないことに苛立ち、一種の幻想を起こして自らを慰める。

主よ、いつまでなのですか。……

いつまで敵はわたしの上に

あがめられるのですか。（13・1～2）

わたしの敵は退くとき、

つまずき倒れてあなたの前に滅びました。……

敵は絶えはてて、とこしえに滅び、

あなたが滅されたもろもろの町は

その記憶さえ消えうせました。（9・3～6）

われらの神は救いの神である。

死からのがれ得るのは主なる神による。

神はその敵のこうべを打ち碎き、

おのがとがの中に歩む者の

毛深い頭のいただきを打ち碎かれる。

主は言われた、

「わたしはバシャンから彼らを携え帰り、

海の深い所から彼らを携え帰る。

あなたはその足を彼らの血に浸し、

あなたの犬の舌はその分け前を

敵から得るであろう」と。（68・20～23）

聖なる憎悪

この怨恨の精神は決して過去のものではない。1993年8月19日のNHKテレビ衛星第一で「ワールド・リポート、ユダヤ教過激派」(再放送)という番組が放映された。イギリスのチャンネル4「ディスパッチ」のリポートだそうである。番組の冒頭に「”聖なる”憎悪—ユダヤ教過激派—」という字幕が出た。(拙論の題にはこの言葉を借用した。)イスラエル占領地ヘブロンの前年12月から当年の2月までの動静を取材したもので、ユダヤ教徒とイスラム教徒の果てしない抗争の一端を紹介していた。番組の中に、イスラエルの子供たちがスクールバスの中で齊唱する場面があった。字幕の日本語訳はつぎのとおりであった。

世界中がアラブを憎む

一番大切なのは

一人ずつ殺すこと

この足で敵を踏みつけ

この歯で敵にかみつく

この唇で敵の血を吸う

今こそ復しゅうのとき

(2) 汝の敵を愛せ・・・<キリスト教>

ユダヤ思想がヘレニズム世界に広く知られるようになると、それはヘレニズム世界の知識人の批判にさらされた。ローマの歴史家タキトゥスは「ユダヤ人のあいだでは、われわれが神聖だと考えるものはすべて世俗的であり、他方われわれにとって非道徳的と思われる事柄を彼らは許容しうるものとみなしている」(『歴史』V,4)

ネロのキリスト教弾圧に関連して、ローマの文人スエトニウスは「前代未聞の有害な迷信に囚われた人種であるクリストゥス信奉者に処罰が課せられた」(岩波文庫『ローマ皇帝伝』6,16)といい、タキトゥスは「彼らの人類に対する敵視のゆえに、罪に定められた」(『年代記』XV,44)といっている。

ギリシャの歴史家プルタルコスは敵に攻撃されても安息日だからといって坐したままでいるユダヤ人の頑迷さを嗤っている(『モラリア』「迷信について」169・4)

グノーシス主義者たち(この中にはキリスト教徒もいる)は旧約の価値観を逆転させて、人間に知識を授けてくれた蛇を讃え、いわれなく虐げられたカインやエサウに同情した。(ハンス・ヨハナス著、秋山さと子、入江良平訳『グノーシスの宗教』、人文書院、1986、pp.135-136)

ユダヤの神を蔑視するものも現れた。キリスト教徒マルキオンは神に二種類あるとした。一つは属性を記述することのできない隠れた神であり、一つは世界を創造し支配する職的な神である。後者が卑小な性格の持ち主であることは、その哀れむべき産物を眺めるだけで明らかである。(同上、p.194)

グノーシス主義の作品ナグ・ハマディ文書にも同様の文がある。そこではユダヤの神は神としては二次的、三次的な存在とされ、ヤルダバオト、サクラス、サマエルなどと呼ばれているが(「ヨハネのアポクリュフォン」写本II、§35 [荒井献他訳『ナグ・ハマディ文書I 救済

神話】岩波書店、1997より])、いずれも蔑称のようである。エレーヌ・ペイゲルス『ナグ・ハマディ写本』白水社、1996、から引用しよう。

彼は盲目であり、・・・[その] 力と無知 [と] 傲慢の [ゆえに] 彼はいった、「神は我なり、[我のほかに] 神なし」と。彼がこう述べたとき、彼は「全き者」に対して罪を犯した。すると一つの声が、絶対的力の領域である上界から聞こえてきた、「サマエルよ、おまえは間違っている」。サマエルとは、「盲目の神」の意である。(「アルコーンの本質」) (『ナグ・ハマディ写本』 p.75)

気が狂って・・・彼は言った、「我は神なり、我のほかに神なし」と。なぜなら、彼は…自分の出所を…知らなかったからである。…そして彼は、自分を取り巻く被造物と、自分の周りにいる、自分から出た天使の大群を見たとき、彼らに言った、「我は妬む神なり。我のほかに神なし」と。しかし、こう告げることにより、彼は天使たちにほかの神も現に存在することを示したのである。なぜなら、もしほかに神がないのならば、彼はいったい誰を妬むことがあろうか。(「ヨハネのアポクリュフォン」) (『ナグ・ハマディ写本』 p.76)

現代では死海文書の編集責任者ストラグネルの衝撃的な発言がある。「ユダヤ教は・・・民間伝承の宗教であり、高次元の宗教ではない」「消え去るべきだった時に生き残った」「恐ろしい宗教だ」(ハーシェル・シャンクス編、高橋晶子、河合一充訳『死海文書の研究』、ミルトス、1997、p.367)

わたしには健全に見えるこれらの見解は、結局、異端として退けられ、旧約を聖典に含める今日の正統派キリスト教が確立した。

だが、キリスト教はそれによって旧約の「聖なる憎悪」を引きつぐことになった。キリスト教は愛の宗教であるといわれている。だが、愛の宗教の底には旧約に由来する憎悪の精神が潜んでいる。このことを理解するためには単に文字が読めるだけではだめである。文字の底を読みとる心理学者の能力が必要である。

キリスト教の精神を最もよく示す言葉は「敵を愛せ」(「マタイによる福音書」5・44)である。新約の「愛敵」は旧約の「憎敵」を超えるものとして画期的である。しかし、半分しか超えていない。「敵を愛せ」という言葉はひとに意識のレベルで「愛」の観念を吹き込み、無意識のレベルで「敵」の観念を吹き込む。そして無意識のレベルで及ぼす影響は意識のレベルで及ぼす影響より強い。なぜなら、ひとは意識するものは改めることができるが、意識しないものは改めようがないからである。²⁾

右の頬を打たれたら、左の頬を向けてやりなさい、という。これは愛の精神を表すものではない。相手を挑発し、相手に罪を重ねさせる行為である。真に相手を思いやるなら、右の頬を打たれたとき、静かに身を引くべきである。蛭沼寿雄氏はセネカの「相手が汝を打つときは退け」(「怒りについて」II,xxxiv,5)という言葉を消極的とし、イエスの「左の頬を向けよ」という言葉を積極的とし、後者を上等とするが(『死海文書』、山本書店、p.65)、これは氏が修辞に

目を暗まして、心理を読むことができなかつた結果である。

左の頬を向けるのは、のちに神から多くの報酬を受けるために、いま多く支払っておこうとすることであり、そのためには相手を悪人にもかまわないということである。キリスト教徒が報酬を期待して愛することはつぎの言葉に示されている。「自分を愛するものを愛したからとて、なんの報いがあろうか。そのようなことは取税人でもするではないか」（「マタイによる福音書」5・46）

敵を許すのは、のちに敵に多く支払わせるためである。パウロはいっている。「自分で復讐しないで、むしろ神の怒りに任せなさい。なぜなら、『主がいわれる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と書いてあるからである。むしろ、『もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである³⁾』」（『ローマ人への手紙』12・19～20）

敵の破滅する日が待ち切れず、未来の出来事を完了形で語るダビデの精神は、『ヨハネ黙示録』にしっかり受け継がれている。「このいのちの書に名が記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた」（20・15）

イエスはいった。「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである」（「マタイによる福音書」10・34）。十字軍戦争、異端者の火焙り、サンバルテレミーの虐殺、スペイン人のインディオ虐殺（「この40年間にキリスト教徒たちは1200万人以上のインディオを殺した」とラス・カサスは記す。『インディアスの破壊についての簡潔な報告』（岩波文庫）、p.21）、北アイルランドにおけるカトリックとプロテスタントの抗争、ナチスによるユダヤ人600万人の虐殺——たしかにイエスはつるぎを投げ込むためにきたのである。

キリスト教はヘレニズムの影響を受けたヘブライズムである。ヘブライズムでは神は絶対であり、神の掟は人間の心情に逆らうものであっても順守されなければならない。一方、ヘレニズムでは人間の精神が何よりも大切にされる。キリスト教はその影響を受けて、人間なら誰もが好む「愛」を前面に据えた。そのことによって、キリスト教は一民族の宗教思想を全世界に解き放つことになった。

これについて、わたしのグノーシス風のコメントを記そう。「ヤルダバオトはヘレニズムの中でも自らの憎悪の教えが生き続けられるようにヘレニズムを利用してキリスト教を作った」

（3）片手にコーラン、片手に剣・・・<イスラム教>

コーランの引用については井筒俊彦『コーラン』（岩波文庫）に依拠することにする。意外なことに、この『コーラン』からは予想したほどの激しさが感じられない。それどころか莊重さえ感じられない。キリスト教の聖書でしばしば起きるハッとするような警句との出会いもコーランでは起きない。井筒氏がいうように、アラビア語原典の風格は日本語には翻訳できないということか。いずれにしても、嫉妬と呪咀の精神はコーランでも健在である。すなわち、

ムーサー（モーセ）がいう。「主よ、汝はフィルアウン（ファラオ）とその長老たちに現世

での榮耀と富貴をお授けになりました。主よ、どうか彼らが汝の道から迷い出しまいますように。主よ、彼らの財宝をあとかたもなく消滅させて下さりませ。彼らの心をいよいよ頑なにして信仰を納れさせず、最後に苦しい罰をなめさせてやって下さりませ。」アッラーがいう。「汝の願いは聞き届けた」。(10・88~89)

イスラム教の特徴に好戦的な性格がある。次のような言葉を聞くひとが「聖戦」(ジハード)を叫ぶようになるのは当然である。

「汝ら、アッラーの道に（回教をひろめるために、の意）戦えよ」(2・245)

「宗教がすべてアッラーに帰するまで彼らと戦い続けよ」(8・40)

「神聖月があけたなら、多神教徒は見つけ次第、殺してしまうがよい」(9・5)

「このようになったのも、もとはと言えば彼らがアッラーと使徒に叛いたからじゃ。アッラーと使徒に叛くような者にたいしては、アッラーは激しい罰を下し給う」(8・13)

「彼ら（敵軍）を殺したのは汝ら（回教徒）ではない。アッラーが殺し給うたのだ。射殺したのはお前（マホメット）でも、実はお前が射殺したのではない。アッラーが射殺し給うたのだ。これは信者たちに有難い恩寵を経験させようとしてし給うたことだ。まことにアッラーは耳聰く、一切に通じ給う」(8・17)

セム系の宗教においては憎悪は正義の姿をとって現れる。信徒は異端者を殺すことを正義の行為と考えるから、ためらいなく人を殺すことができる。ギリシャ的ヒューマニズムのブレキがからなかつたイスラム教はもろにこの傾向を発展させた。イスラム教がまたたく間に世界に広まったのもこの宗教の好戦的な性格によるだろう。

ハンチントンは「イスラム文明と（他の文明と）の境界線は暴力によって特徴づけられている」とし、セルビアの東方正教信徒、イスラエルのユダヤ人、インドのヒンドゥー教徒、ビルマの仏教徒、フィリピンのカトリック教徒と彼らの軋轢をあげている。（ハンチントン「文明の衝突」『中央公論』1993年8月号、p.360）。

現在ではこれに次のものを加えることができる。ソ連の崩壊後にソ連から独立した中央アジアの諸共和国における政府とイスラム原理主義との対立。ロシア連邦内のイスラム教徒の共和国チェチェンとロシアの対立。アルジェリアにおける政府とイスラム原理主義の対立。アフガニスタンにおけるイスラム教徒同士の主導権争い。インドネシアのイスラム教徒の、東ティモールのカトリック教徒に対する迫害⁴¹。

セム系宗教は一般に不寛容と考えられているが、山内昌之氏はイスラム教は寛容であるという。なぜなら、被征服民はジズヤ（人頭税）さえ払えば自分の信仰を守ることが許されたからという（1999年10月6日NHKテレビ「視点・論点」）。ジズヤについてはコーランに次の文がある。「アッラーをも最後の日をも信じようとせず、アッラーと使徒（マホメット）の禁じたものを禁断とせず、また聖典を頂戴した身でありながら真理の宗教を信奉もせぬ、そういう人々にたいしては、先方が進んで貢税を差出し、平身低頭して来るまで、あくまでも戦い続けるがよい」(9・29) [三田了一『日亜対訳注解・聖クラーン』世界イスラーム連盟、1972,p.217によれば井筒訳「貢税」の原語は「ジズヤ」である]。貢税を差出さなければ殺されるのだ。

聖なる憎悪

これを寛容というのだろうか。

641年にアラブ人がエジプトのアレクサンドリアを占領したが、ジズヤと引き換えにキリスト教の信仰を許した。しかし、30年のあいだにキリスト教徒はシチリヤ島と南イタリアへ逃れ、アレクサンドリアのキリスト教徒はとるに足らぬ少数になった。(D. クリストイ=マレイ著、野村美紀子訳『異端の歴史』教文館、1997、p.111)。イランのゾロアスター教徒はインドのポンペイに逃れた。イスラム教が寛容だったら、このようなことは起きなかっただろう。

イスラム武装勢力は自己の目的の完遂のためには無辜の民衆を犠牲にしても平氣のようである。彼らはウズベキスタン政府との交渉に利用するために日本人技師を人質にした。ロシアではアパート爆破テロが続発し、そのたびに住民が数十人ずつ死んだが、このテロを行ったのはチェチェン共和国のイスラム過激派とみられている。テロリストたちは民衆がささやかな幸せを求めて生きていること、かれらが死んだらその肉親がいかに嘆くかということを想像したことはないのであろうか。恐らく、かれらにとっては、自分たちと同じ信仰を持つもの以外は人間ではなく、虫けらにすぎないのであろう。

最後にセルビア軍（キリスト教徒）が撤退した後のコソボでアルバニア人（イスラム教徒）の少女が歌っていた歌を紹介しよう。1999年4月15日、TBS「ニュースの森」で放映されたものである。

わしさん聞いてくれ
ミロシェヴィッチの首を落としてやる
やつのからだを切りきざめ
穴の中に捨ててやれ
そして奴の死体をセルビア人に見せてやれ
セルビア人の母親からはさるが生まれてくるだろう。

(4) 結び。わたしは三大宗教は消滅すべきだといっているのではない。わたしは三大宗教が信徒に与える強い精神力と行動力とに感服している。建築、絵画、音楽の分野で三大宗教が生みだした成果にも敬意を払っている。わたしが願うのは、信徒たちが、彼らの宗教に潜む負の因子に気がついて、その発動を抑制し、世界の平和を可能にしてくれることである。

共産主義はキリスト教文化の中から生まれた。その教条主義、排他主義からこれもセム系宗教の一つ（神なき宗教）とみなしうるが、本論ではとりあげなかった。

注

1) 1999年11月にヨルダンのアンマンで第7回世界宗教者平和会議が開かれ、その模様が2000年1月19日にNHK教育テレビで放映された。キリスト教やイスラム教の代表者が「本来、平和を願うはずの宗教が…」とか「宗教は紛争に利用され…」などといつており、あいだらぬ宗教性善説への盲信ぶりを示していた。会場の外ではイスラム教徒たちがチェチェン紛争をめぐってロシアを糾弾し、ロシアの国旗を踏みにじっていた。

- 2) 「敵を愛せ」という言葉を聞いて、ひとは思うだろう。「敵をすら愛するのなら、キリスト教徒にはもはや争いはないだろう」と。ひとはまた思うだろう。「ではキリスト教の歴史に争いが多いのはなぜか」と。その理由はこう考えられる。「敵を愛せ」は英訳聖書によれば「汝の敵を愛せ」(Love your enemy)を意味する。「神の敵を愛せ」とまではいわれていない。敵を自分の敵と考えず、神の敵と考えれば、いくらでも敵を殺すことができる所以である。
- 3) 私は「燃えさかる炭火」は「神の怒り」を意味すると考えてきた。最近、ある論文を読み、それは「敵の心に生じる激しい悔恨」を意味するという解釈があることを知った。(袴谷憲昭「法然親鸞研究の未来—松本史朗博士の批判に対する自叙伝的返答—」『駒沢短期大学仏教論集』第五号(1999年10月)、pp.184-185)

従来 Thou shalt heap coals of fire on his head と訳されてきた文が新しい英訳聖書(Bible Society's Chain Reference Bible,1982)では You will make him burn with shame(あなたは相手を恥づかしさでほてらせるであろう)と訳されているという。私は自分が恥すべき誤解をしたのではないかと考え、顔がほてった。しかし、種々の文献を調べ、この解釈はパウロ以後に、聖書学者たちが行った牽強付会にすぎないことがわかった。

オリゲネス(3世紀)は問題の句をつぎのように解説している。「敵に善をもって応じることにより、私どもは神の裁きによる彼らに対する罰を積むことになる」。オリゲネスはこれに先立つ句「神の怒りに任せなさい」についてはつぎのようにいっている。「私どもが自分で果たすことができる以上に重い罰が彼に科される」。

しかし、オリゲネスは愛の教えの信徒としてこの解釈に困惑し、つぎのようにいわざるをえなかった。「この揃には何かもっと神にふさわしい意味がこめられているのではないか。恐らく、この炭火は敵の利益になるものとして積まれるのである。すなわち、私たちの好意によって敵の心に悔恨が生じ、良心の火が燃え上がることを意味するのである」。(オリゲネス著、小高毅訳『ローマの信徒への手紙注解』創文社、1996,p.603.趣意。)

アウグスティヌス(354-430)はいっている。「燃えあがる炭火」は「厳しい罰」のことではない。われわれの善によって敵の心に生じ、その悪を焼きつくす後悔の念のことである、と。(‘Explication de quelques propositions de l'Epitre aux Romains’, Oeuvres Complètes de Saint Augustin, Traduites en Français et Annotées par Péronne et autres, Tome XI, 1871, p.28; ‘Sermon CXLIX’ do., Tome XVII, p.405)

アウグスティヌスはこの解釈の文証としてダビデの『詩篇』の言葉を引用する。「欺きの舌よ、おまえに何が与えられ、何が加えられるであろうか。ますらおの鋭い矢と、えにしだの熱い炭とである」(120・3~4)

アウグスティヌスはこの言葉をダビデの自己反省(後悔の念)の言葉と解釈したのであろうか。「欺きの舌」がダビデのものであったら、そう解釈してよかつただろう。しかし、この舌は敵のものなのである。

「高ぶる者に恥をこうむらせてください。彼らは偽りをもってわたしをくつがえしたからです」(119・78)。「彼らは偽りをもってわたしを迫害します。わたしをお助けください」(119・

86)。「わたしは、あなたのもうもろのさとしにしたがって、正しき道に歩み、すべての偽りの道を憎みます」(119・128)。「わたしは偽りを憎み、忌みきらいます。あなたのおきてを愛します」(119・163)

このように、ダビデは一貫して、「彼らは偽りをもってし」「自分は偽りを憎む」といつているのである。ダビデの「主よ、偽りの唇から、欺きの舌から、わたしを助け出してください」(120:2) という句を上掲の 119・86 の句と比較するなら、「欺きの舌」が敵の舌であることは疑いの余地がない。アウグスティヌスが引用した句は敵に対する呪咀以外の何物でもない。

「炭火」がダビデにおいて、したがって恐らくユダヤ的伝統において、「神の怒り(罰)」を意味したことは、次の文によっても明らかである。

「主は悪しき者の上に炭火と硫黄とを降らせられる」(『詩篇』11・6)。「燃える炭を彼らの上に落としてください」(140・2)。

オリゲネスやアウグスティヌスの釈義はユダヤ的伝統に反するものであるが、キリスト教では伝統的解釈となって後世に伝えられた。ルターはその著『ロマ書講義』においてアウグスティヌスの解釈を援用し、内村鑑三をはじめとするわが国のロマ書解説者がそれにならった。ユダヤ教から愛の宗教を導き出すためには人々はいかに事実をねじ曲げねばならなかつたかがわかる。なお、辞典類には炭火を入れた鉢を頭上に置くエジプトの悔い改めの儀式への言及がある。

最後に残る問題はパウロ自身はこの句をどう解釈していたかということである。この句の前には人を愛せよと説く言葉が繰り返されている。その中には次のような言葉が含まれている。「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい」(『ローマ人への手紙』12・14)。「だれに対しても悪をもって悪に報いるな」(12・17)。このような言葉を口にするパウロが「炭火」を「神の怒り(罰)」と考えたはずがないとアウグスティヌスはいう。だが、「敵を愛する」とことと「神が敵を罰することを期待する」ことが矛盾しないのがこの思想なのだ。なぜなら、愛するのは、神から報酬を得るためにだからである。

「炭火を頭に積む」という表現と同じパウロの「神の怒りを身に積む」(2・5) という表現と比べれば、「炭火」が「神の怒り」を意味する可能性は大きい。パウロがこの言葉をそのまま用いて何の注釈も施さなかつたことが、その可能性をさらに大きくする。なぜなら、それが別のことと意味するのであつたら、パウロは、アウグスティヌス、ルター、カルヴァンらが危惧したと同じように、人々が誤解することを危惧して、何らかの配慮を示したはずだからである。

4) 1999年11月14日のNHKテレビ「イスラムの潮流」によると、インドネシアではアンボン島でも紛争が起きている。イスラム教徒によって焼かれたキリスト教会と、キリスト教徒によって焼かれたモスクが画面に映った。ヒラという町のキリスト教徒は、教会を焼かれ、山へ逃げた。彼らはいう。「イスラム教徒はわれわれを襲撃しながら、『偽善者は殺す、神は偉大なり』と叫んでいた」。「妊婦が腹を裂かれ、殺され、焼かれた」。

つぎの4つの記事は2000年1月4日の毎日新聞(神奈川版) p.7(僅か1日の僅か1頁!)から拾ったものである。

- (1) 3日、ベイルートにあるロシア大使館が武装グループに襲われ、死者2、負傷者6を出した。チェチェン問題に抗議してのイスラム過激派によるテロとみられる。
- (2) 3日、カシミールの州都スリナガルの青果市場で地雷が爆発、13人が死亡、35人が負傷した。イスラム武装勢力のテロとみられる。
- (3) インドネシア・マルク州でイスラム教徒とキリスト教徒が衝突し、昨年のクリスマスから3日までの死者が500人を超えた。
- (4) 3日のエジプト政府の発表によると、カイロ南方約400キロのコシェハ町とその近郊でイスラム教徒とキリスト教系コプト教徒が衝突、20人が死亡、33人が負傷した。